

重修真書太閤記

十編

和書門			
三四〇五三	二二六	一三	四〇
號	函	架	冊

庫文閣内	
三四〇五三	和
四〇	書
一七二函	一
二	二

第十

内閣文庫		
番號	和	34053
冊數	40(21)	
函號	171	45



柳菴栗原氏校訂

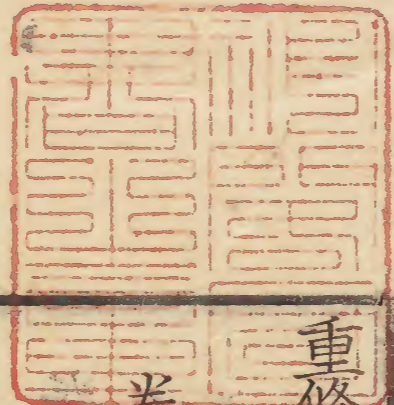
重修

真書

太閤記十編

東都書肆

知新堂發兌



重修真書太閤記十編總目錄

卷之一 大小平治古事 關原の事

羽柴勢三州勢手配之事

并兩方先陣勇戦の事

卷之二 關原の事

淺野蜂湊賀尾州勢を破る事

秀吉自身三州旗本へ向ひむの事

榊原康政諫言の事

并本多忠勝勇戦の事

卷之三

太閤記十編總目

羽柴宰相三刈御所凱陣を勧る事

并内府信雄公秀吉卿と和睦の事

卷之四

秀吉卿大納言に任せらるる事

并本多平八郎忠勝異見の事

浅野堀尾等濱松に使者の事

并於義九殿秀吉の養子と成る事

卷之五

諸國之大小名秀吉に隨順の事

并佐々木義郷を召出事

根來衆徒再ひ一揆等と催ふ三城籠の事

卷之六

并秀吉紀州に進發之事

根來寺衆徒退散の事

并後藤又兵衛基次の事

大納言秀長卿根來寺へ押寄る事

并秀吉公謀略の事

卷之七

秀吉公再度不意を討事

并根來衆徒等滅亡の事

千石堀濱の城合戦の事

并一揆等兩所退散敗軍の事

卷之八

秀吉公太田城水責の事

并一揆等降参の事

秀吉公高野山を攻る事

并紀州平均の事

卷之九

長曾我部家系の事

并軍議評定の事

石田左吉三成長曾我部元親へ使節の事

并四國攻決定の事

卷之十

加藤清正三ヶ濱と乗取事

并小早川後誥洞古合戦の事

加藤清正再度洞古合戦の事

并五十路井内匠生捕事

卷之十一

清正五十路井内匠と降事

并三人衆人質と送る事

清正松山の城攻責る事

并長曾我部信親後結吉川元長敗軍の事

卷之十二

金子傳兵衛吉川勢と破る事

并熊谷四郎左衛門尉勇戦の事

加藤清正松山城と乗取事

并金子傳兵衛久武内藏之助と救入事

卷之十三

金子傳兵衛再度勇戦の事

并五十路井内匠より使者の事

卷之十四

吉川小早川長曾我部信親合戦の事

并金子傳兵衛軍の事

金子傳兵衛智謀の事

并吉川勢夜討の事

卷之十五

吉川拔掛難戦の事

并信親合戦西川敗軍の事

加藤清正加勢の事

并两川對陣小早川智計の事

卷之十六

浮田黒田讃州發向の事

并後藤又兵衛惡風渡海の事

細川源左衛門尉偽計の事

并小西彌九郎不覺の事

卷之十七

信親讚州後誥勇戰の事

并後藤又兵衛智勇の事

大納言秀長卿淡州著陣の事

并曾呂利新左衛門尉の事

卷之十八

大和大納言近江中納言阿列渡海の事

并後藤又兵衛智謀の事

長曾我部掃部頭夜討の事

并秀次勢大麻山と責る事

卷之十九

後藤又兵衛大麻山と責落と事

并長曾我部掃部頭勇戰の事

大納言秀長卿一宮城責の事

并長曾我部信親後誥の事

卷之廿

小西彌九郎拔掛難戰の事

并上方勢敗軍の事

上方勢四國勢と合戰の事

并長井半十郎勇戰の事

卷之廿一

加藤清正智謀の事

并四國勢敗軍の事

卷之廿二

清正金子傳兵衛を討る事

并加藤吉川勇戦の事

加藤清正土列發向の事

并清正道ある山林を押行事

卷之廿三

加藤清正焼山城と乗取事

并上方勢金子傳兵衛尉合戦の事

卷之廿四

金子傳兵衛尉勇戦自殺の事

并熊谷四郎左衛門尉被生捕事

卷之廿五

四國勢切所よめりて清正と拒く事

并内大臣秀吉公南海と航ぬ事

後藤又兵衛尉陣氣と見る事

并五十路井内匠一宮へ行谷忠兵衛子説江村

を降し事

長曾我部元親本國へ歸る事

并福嶋正則勇戦の事

卷之廿六

長曾我部信親大濱子籠城の事

并秀吉公陣取手配りの事

三ヶ國へ出張勢皆土列へ引退事
并上方勢八方より土列へ討入事

卷之廿七

長曾我部信親武勇の事

并加藤清正高知責の事

片桐助作大濱へ使節の事

并信親高知へ赴く事

卷之廿八

信親父元親と説事

并片桐智謀元親降参の事

阿列公方家由來の事

并長曾我部元親上洛の事

卷之廿九

秀吉公關白職及び五奉行の事

并豊臣朝臣姓を賜ふ事

大佛殿建立の事

并北野大茶湯の事

卷之三十

秀吉公御道具目録の事

并利休茶器の事

後陽成院聚樂亭行幸の事

并供奉行列の次第の事

へ前田與十郎とれり西下市場城より前田與平
次大野城より山口長次郎と籠らせけるは信雄公
まゝ萱生ふ要害と構え佐久間駿河守とて是と
奉行せしめその留守のうち前田與十郎と蟹江居
しむ龍川右近將監のまゝと時節ありとこれのひか
そりし使者と與十郎方遣らし我等は知あふ如く
柴田ふ一味して秀吉の敵とありつる身なり然る
と秀吉さうし心よこしむとなく禄とちち城
を預く其心中の廣大あることたとへて取よりのふ
し一定天下の主とありあふべくあめられぬなり
其の御邊りとの武邊といひ器量ありあふる人と

知あふぬ北畠殿の御下よ朽くあふんと近頃以
て糸惜く存いなりとや御勘辨ありて然るべく
ゆ遅くは終り三家老の如くなりあふへとありと
のこをうら與十郎も實とおのひ遂に一益も同
心たりしむと一益もと與十郎とて山口長
次郎と説しめていそし北畠殿の心をくく人
と猜ひあふと強ひての功あさの身と立る地あく
功あさの身と損とると津川岡田淺井と同一なる
へ早く處分と定めあへやといひしうとも長次
郎重政さうし二心と存をば是よ於て與十郎蟹江
と入置し長次郎と母と殺とへといひて云送りし

めとも重政ちとも動をば我母此城に入あふ時宣
ろく漢の王陵り母とあふんと難くもおのり汝
ふく王陵とあふちやといふよしめらむと只今正ふ
其詞の合んる時あり重政はさく王陵とあふ
て佐久間駿河守頼房れ思義と全くとへは是
母の意違ふぬ処ありといふ瀧川左近将監あれ
と聞て其義あふいとて九鬼大隅守嘉隆を語らひ
海陸より推寄て大野の城とらむ九鬼船十餘
艘大野川と漕上り城と上らんととらむと重政松明
と投てあふと焼あつと先陣二艘ハ既と焼失した
る九鬼兵上陸しけると山口長次郎急あふと

討たりしむと瀧川兵も進得ととらむと
ふと井伊兵部松葉の郷より馳來て海陸の寄手
と拒く北畠殿あふと聞食梶川五右衛門尉秀
盛小坂孫九郎雄吉と二千餘騎をさくとて是と
援ふむあふと長次郎と拒と戦ひけるよと
う援兵の兵もさか力と竭とらむ終と瀧川九鬼
の兵士うちまけて引退く北畠殿もやうと大野と
渡御あつと山口誠忠と感あふとめしけるよ
と宣ひしむと長次郎も面目とらむとあふと
そのうち三州御所尾州海東郡戸田と渡御あつと
時本多平八郎と御使と山口と召きて仰出さ

けるハ山口長次郎事先年佐久間右衛門尉ニ從テ
高野山ニ上リ佐久間と見捨を今早ニ瀧川ウ説メ
從ルベ節義といひ忠心のいひ當世得ルニ侍
とて御馬を賜ルテけり

作者評云子として母を質と一母の害をうる
とて己の節義と立るハ安んを所あり故ニ
余父の身として母と解テ抑子の為ニ質と
あらん時我身と活して子と不義ニ陥レハ天
下の人ニ笑ルル時ハ亦その辱めを避
る地あり我を殺して子の義と立レハ時ハ天
下の人として此父として此子ありと賞歎して

止るもの能此処と思ふことよきを
六月のころ瀧川左近將監預る処木造の近
邊の百姓とも相集りてのいひける様北畠殿といふ
の我等遠祖より伊勢の國司より

もとも我等累代の主君よりあり木造殿
といふ北畠殿の庶流とておとすもいふといふ
みゆ前も我等ハ北畠殿より後へきやの如
也瀧川左近といふいびくの人あるや我等ハ知
らび左近も後へくハ我等も大将よと云出り
一人二人と聞えりも五人十人乃至百二百人及び

ける不どよいでや左近う大野攻の向ひて留主を
幸一攻せめて見をやと云ふとあはれ一志郡の
地下人共聞傳へくせ集り紙幡紙幟おしきたる
幾組より組合を大手うめて備と立ちあふ二三千
人よ及ひしうの木造近く押來り鉄炮をくちめ
と作りけるより富田平右衛門尉大に驚かすの
無勢よと一揆の多勢よりけあふことたらんよ
何とあるへとつらもくわらふて城を
取らる様のよふとへらなりとて一揆よはらひ
を立て申けるハ何車の誣は左様ある徒黨をいかし
つるを願ふとあはれ難義の筋とくゆ申をのり

あも叶ふつらなりとありけると一揆の大將聞と
りまの使と囚えそくへら願ひとつあ余の義
ふあはれ城と明て富田も龍川も罷歸ういへと申
さやとのひあはれ耳畠との返をへらなりとて
とまていゆるとありと云て陣門を追出しくうハ
使者大汗なりとて城より返り富田よりくと申
いせハ富田以の外よ仰天しより一揆の陣の様と
問いせハ使者答ふる様こはいひまの本陣よりハ
三重ふ幕と張幕の内外よ檢見と置ま本陣よりハ
鐘大鼓とうげとむくの役人つら甲冑とて嚴重
ふとあへと設けその傍よ褒美の長持うとあはれ昇

つゝの筆取三人帳を扣えてさし圖とすの体誠と
次第とすのひて見えいさく大将へ誰とすあらん
名も聞とゆへとも年のふと四十許とす鬚多く
黒鬚あり後の地下人ふもあらし定めて上方
の浪人あとう業あらんともあらし談りし富
田とす驚と然勢ハ凡何と見つと問ハさ
とハハ五十人あらし立たる鉄炮の隊外幕の内
左右ふ配りて五立と立たはるの五百の鉄炮あ
りと知召へその次ハ長柄のの同く五立ふ
立たはる是も五百本ありと覺えハ中の幕の内
と五立ふと三隊ありと左右ふ配りたハ

是も三百人とあはれ然とハ是等の負千三百
人をも手替りして二千六百人なり此外侍
のうとハ目も及ハハ立たる処とあり凡二三
百人ハ見受ハ猶幕の陰と何との人と置ハハ更
よあハハ不申凡千餘人ハあると然とハ總
勢三千の外二三もハハあハハ恐ろしくとす
けとハ富田とすあハハとすも瀧川と
びて其上のとも云大野へ飛脚と立たりけるを
の夜一揆のの共近々とおし寄來り関と作り鐘
とあり只今責りてとあらし富田取め
のも取あハハ夜中と城と出りつとともなく逃た

のりり瀧川元近將監と前田與十郎とへ大野の城
 と責て居たりけるも木造の飛脚到來し一揆の
 様と注進したるに瀧川元近も前田與十郎も
 肝とほり木造の近隣ありし一揆とて
 とへおのひもさるし木造の車の出來し不
 思議のことなりたるに大野の城つゝの
 援兵もよこ次第に押來りつゝの城を落さんと
 のひもさるし木造と攻取とて後悔とら
 共せんありし早く人数と引上て一揆を追拂
 へかといふも大野とて前田下市場の兩城
 に入らんとしけるを見て井伊兵部真先進

敵の當地と引去と見えし追討しつゝ
 六月十六日の早天におつゝ火花
 とらして戦ひし瀧川元近つゝの
 小舟と取のりひそく城と出て逃去けり明と
 十七日の曙より石川伯耆守安部彌市郎とよひ北
 畠殿の加勢一同兵部と助け切りし
 城も隨分ありしつゝも寄手の勢
 大浪の打返を如くしけり下市場の城
 へつゝ十八日の明りし城主前田與平次
 つゝとも逐電しけり

重修真書太閤記十編卷之一終

大隅記十編卷一
六月十九日三州勢并内大臣信雄公の御勢一同
入下市場城を十重廿重に取圍んで攻戦ふ城の本
人前田與平次郎兄甚七郎種定ひそく城を出九
鬼大隅守り陣船に趣き早く加勢として入城をん
こと頼こしうへ九鬼一議も及ぶ船とおし出
し下市場の城に入んとつるふ折しも潮と知遠
く干瀉とひりうへ徒に城とありめてなるの

重修真書太閤記十編卷之二

浅野蜂須賀尾州勢と打破る事

并秀吉自身三州旗本に向ひあふ事

六月十九日三州勢并内大臣信雄公の御勢一同
入下市場城を十重廿重に取圍んで攻戦ふ城の本
人前田與平次郎兄甚七郎種定ひそく城を出九
鬼大隅守り陣船に趣き早く加勢として入城をん
こと頼こしうへ九鬼一議も及ぶ船とおし出
し下市場の城に入んとつるふ折しも潮と知遠
く干瀉とひりうへ徒に城とありめてなるの

沖^{そと}したるよりけりめくる處へ三州の岡部彌次郎長
盛生年十九歳せし許され剛の者也津島よりも
みよ揉^{もみ}て馳^ち來りける大隅守の番船の渚^{しづ}よそふ
て船とりけ居たる處へ押寄て鉄炮と打りけ煙の
つよ絶^たざるものと見計^{みけ}ひ面もあつて切^きり
けし九鬼^{くき}りの共狼狽^{ろうたい}廻り水よ入て逃^にり
の數と知^しび岡部志^しよりし手勢といさめて突^つるを
つこふを攻^ありし九鬼^{くき}の手^ての者^{もの}戦^{たたか}ひまひ散々^{さんざん}と
なりて逃^にりしと岡部^{おかべ}侍^{ざむらい}よ朝比奈^{あそひな}金兵衛^{かねべゑ}とて
カハ三十人よと上下^{あがりくだり}しとる船^{ふね}と一人よと自由^{じゆう}と
とる若者^{わかしよ}あり打物^{うちもの}取てハ駿遠^{しんえん}三よ並^{なら}ぶののあそ

めのやうにける九鬼^{くき}の船^{ふね}よ乗^{のり}りし堅横^{けんぎやう}十文字
よ切てハ刻^きるねてハ切心^{きしん}のまゝと狂^{くる}ひまらけ
ると見て九鬼^{くき}侍^{ざむらい}大将^{たいしやう}九鬼^{くき}長兵衛^{ちやうべゑ}と敵^{てき}のふ
ふまひやいてめの見^みをんと云^いふと五尺^{ごせき}を
の長刀^{ちやうぼう}と以てるをりしとけると金兵衛^{かねべゑ}ちと遣^や
過^すし誰^{たれ}とあひハ九鬼^{くき}長兵衛^{ちやうべゑ}いつと遠州^{えんしゆ}難^{がた}
よと出^い合^あしち絶^たて久^{ひさ}し面^{おもて}と合^あをばれや我^{われ}
等^ら太刀^{たち}の鏑^さとをんと打笑^{うちわら}へハ長兵衛^{ちやうべゑ}も持^もたる
長刀^{ちやうぼう}取直^とし朝比奈^{あそひな}と急度^{いそぐ}とつりよも四五年以
前^{まへ}伊豆^{いづ}國^{のくに}へ働^{はたら}きし時^{とき}白輪^{しろりん}の沖^{せき}よ船^{ふね}りげて居^ゐたり
時^{とき}獵船^{りやくせん}よと漕寄^{そうき}たりし駿河^{しゆな}武士^{ぶし}との時^{とき}ハ其方

運りく逃たりし今日ひ遁さト覺悟をもつひ
つひも打寄て互よとと伺ひ居たり金兵衛
へかつり上ふ年つこ四十ふ満を長兵衛へ長
刀の達人ふとと齡とてよ五十と越たりかと聲
うけ打合へ又引開りて左右ふととさつと掛
とへさつと離と七十餘合ふ及べとも双方聞え
上手更ふ勝負も付ぬ金兵衛太刀と投をてとふれ
や組んと走りめくる長兵衛へ組とと長刀よと
あしらびしり杭柱よりうりてあのくは蹟く
処で金兵衛はとくけりて是と押之終と擒より
たりけり長兵衛りくらうり後へとり敷衝くの

のありけり九鬼り船へ本國志州とさ
て引返をめりのちへ瀧川左近將監もたり
ゆね船よ打り逃けると北畠殿の勢と間あり
追掛しり瀧川り手の者散々と逃りしり
と爰よ追つめりし責付多勢と討取あつこ
へ一益り馬印と奪取てけり三州勢も間宮造酒丞と
松平新助忠綱も先よ進て戦ひけりら亂軍のら
ちよ討とけりしその夜と成時とあり
と頃瀧川城と出て行方らびなりしり下市場と
の城へさら落しけり然る生捕ののととめり
瀧川り行衛と問ふ蟹江よ入りあらんとりふまよ

うさ〜の敵は足とためさるゝあとのふりとあをわ
と蟹江とさ〜と發向〜大手の門ふおしよを息を
も継せし責たりけり三列勢の中子本多八藏長久
手ふて森武藏守の死骸を得て其太力力を分捕り
つれとも死首おしは是を取をわまりよ本意か
とみ思ひ〜の此処よて能戦ひ敵味方の目と驚
〜終戦死〜たりけり一益り子と瀧川三九郎殿
〜たりびると水野藤十郎勝成ふと敵と見〜追り
け〜るよ三九郎も藤十郎と見知たり互〜後日と
恥た〜う〜の馬と駐めて鎗と合を散と火花の電
光石火〜〜ともをぶ突つは〜追つう〜

つめけ〜の〜ゆ〜み〜の〜又〜り〜め〜へ〜二人
とも參河尾張の隣國あり常〜出合知つ知〜中
て〜あり秘術技盡以若武者のおとらぬ藝をめさ
お〜ま三九郎の父左近の行衛をおのひ如何あり
去と片心よかけて思ふを親と子の思愛とあを知
とけれ藤十郎は三九郎と是非打取て高名ふせん
と踏込〜戦人を早くも三九郎心よま〜と
伺ひ一鞭あつ〜を馬の名よ負篠島牧天よも騰
勢〜城門のうらよ走入る藤十郎の手よ取〜敵
と取る〜の〜と本意あげよ引〜と六月廿一日
三列の御本陣小牧山よ〜の頃下市場其外よ〜

討取上方勢の首とも獄門よりけ其軍功を賞
せらる秀吉卿は大垣より江州へ凱陣ありありと
廿二日三州勢ありひし信雄卿の御勢追手搦手
より蟹澤よりしを攻圍て攻立し龍川左近
將監以下日置五右衛門尉谷崎忠兵衛龍川彦次郎
必死よりしてあしと守る秀吉卿より加勢として
淺野彌兵衛尉蜂須賀右衛門尉と下されし龍川
龍川よりかど得て堅固より守り拒と戦へはつ
らつと見えは淺野蜂須賀兩人の元より加
勢の事より尾州勢と一合戦して日頃の武勇を顯
るるやとたのびげるるより龍川が勢とありえ

は兩人の勢千五百余騎と一手より信雄公の御
勢の渦巻て扣えたる中へ切て入從横無尋責立
とへ尾州勢多げとともらりの勢も切たてと
立足もなく敗走は淺野蜂須賀へ一處に打寄り
ふ彌兵衛尉軍へよりと仕たり元より北畠殿
の御志よりと得んととるるもあは然に加勢の
役へと和齋たり引返さんとあゆみのりよと云
へ淺野も心得彦右衛門尉よりあを云つと長政も
引返さともとあゆみのりよと一軍をていあ
るぬへと思ひしより尾州勢より一當あてか
り然ると思の外尾州勢のりよと味方あゆま

このふ切勝たり是を切し引取へさなり三州勢ハ宰相殿別の子細あり彼方あり切りしをハ手さばなりとと旋られし三州勢もいなる意趣よ龍川とへ戦へとも我等う手へハ切をもうらび定めく互し子細ありしゆ人数と引上んと淺野真先は太鼓と打へ蜂須賀も同く太鼓をうたせて勢と集め秀吉卿の本陣さし引返り秀吉卿ハ江州へ引返りしゆ諸軍は下知し勲簞の馬は前も後もあし立さを五色の吹貫四つ五つ彼処も爰も吹ありさこれハ秀吉卿のくまはらも定めゆひたりそ

の次は三州陣と見らるる五本骨の扇の馬あり前後左右ふ七八本さしうさしたるハのりやまこの三州御所とよその見る目とよこをり然るよ木深さ森のあかたさうの寄さうけん五色の吹貫ふさあひうとよその勢六七千ゆとらる出たりをら秀吉卿の本陣と見る処よこあさるうも五本骨の扇の馬あり押立て勢ハ二三千んめり静々とけむら秀吉卿ハ鎧も着むる淺黄の帷子の脇うさたるよ白さ羅の羽織さへ一尺計の小脇指さし三尺余の太刀とハ馬廻りよ持を陣頭よらと出是ハ太内守護の羽柴宰相秀吉か

り三州遠州の侍も大将もよく聞あへや凡軍も各
あるこのつとも知たるとやうう名のよき軍して
當代より身と失ひ後世より悪名と流を何やと
哀しうと東海道十五ヶ國のうちよ伊豆相模
武藏安房土總あんと威と振あると云あふ北条の
何某ハ久しく東國の正税と抑留して都に運上を
以王土に住あらし王城に参勤を以然も左京大夫
とやう云よあらし龍様の田舎人のめの知ぬゆ
のよ向て何をいひん参河國に伊勢大神宮の神
衣を調進する故實あるよあの頃絶て奉らぬ由を
てよ聞き遠江國に大嘗會の分國あるよその事絶

て久しどりの日月の照るは是王土なり私
の知処とおのよつるは八州のうちとく王民
なり私の地下人とおのよの誤あり早く盜賊の余
類よひとと弓矢をとて天下太平万民快樂の
世とやうあるとの詔に従ひあへや某く明ら
くよ宣旨と傳へるなり宣旨よまうを心と
改めあらし誰うの過あらん改むると貴とひめ
し又改めあらしは是謀叛八逆の随一とつよ
某とてよ羽林軍の少将たり忽ち節刀とささげて
よ誅とてよ一もゆるとさなり神速よ心
よ問心よ審て秀吉り云処と知あへやとりのひおと

りいと長閑く引入たり

神原康政諫言の事

并本多忠勝勇戦の事

三川勢酒井左衛門尉忠次松平主殿助家忠丹羽勘
助氏次天野周防守以下長澤の勢とも一手となり
て蟹江の大手に向ひ北方へ大須賀五郎左衛門尉
西方へ北畠殿の御勢あり城中より大手海川寺
口へ谷崎忠兵衛前田口へ日置五左衛門尉本丸西
北の方の拒さるる龍川彦次郎のとも一度も切
て出あゆむと戦ひ城中へ引入らんとす
とも大手海川寺口へ酒井左衛門尉忠次松平主殿

助家忠必死となりて攻戦ふより城中へ入ると
得て酒井與七郎忠利生年十八歳蟹江城門大手の
橋の上より城中の兵士と鎗を合せ追込追出し
半時あまり戦ひける終は突勝首を取松平善四
郎康安おかく進みて谷崎忠兵衛尉と鎗を合を
処み城中より放ける鉄炮中りて倒れしうハ郎
等より寄善四郎と肩を掛て引退く松平五左衛
門尉近正進み戦ひあまゝ処手と負しとも一足
を引退り首と取て引返し息繼居たり松平源次
郎家乗り手の侍は河合帶刀同才兵衛太手の門
進しより城中の兵士と鎗と合とすとも相引

引ける暇に松平久助松平隼藏鈴木佐衛門今井加
兵衛梅村喜八郎一同に進みて鎗と合をつつとも
よく戦ひ手と負て引退く武井角右衛門大橋新三
郎兩人の城中へ突て入一足も引を戦死を左衛門
尉忠次火水みなりて攻付しかの城中以の不うみ
難義し終に城門を攻破らゆとさり然とも忠次兵
士氣既に疲れしと見てけしに榊原小平太康政是
も代りて攻戦ふやと二三の丸と攻めたりともや
本丸をとりしやうり六月廿八日小牧山あり
樂田の堀久太郎陣と伺くをける処堀り手あり
も斥候と出し小牧山と伺ひけるより双方の斥

候途中に出合たりしに鉄炮と打つに鎗と合を合
戦し及び敵味方し手負討死多りしとも堀り
手の馬十五疋と奪取ありは三州勢勝軍しとけり
と悦みと限りしやうりしに榊原小平太康政御
前し伺候し申けるに北畠殿の御頼しあり御出陣
あをりしに事弓矢取の擾りさ処しにへとも秀吉
卿いそをよ江州へ引返さし給ひし然らば龍川左
近將監あとし手痛さ軍しと多く士卒と亡やし
軍詮あとしと覺えしにそれも秀吉し向て軍仕し
しく牛角の戦しもいんしとめ一益しと敵と
あをりしと口惜しの上し秀

吉の申てい天下太平の勅定とあるは實に恐入て
いなり普天の下王土よありびとつふことなく卒土
の濱王臣よありびと云とす申は本文もいん
のく伊勢大神宮の神衣と調進し奉るは三列渥美
郡今田印内市場漆田青津赤松新見の七郷の民の
課役とゆるし加治村浦村大津等とて大神宮に
うつらふ民等の上と安く沙汰とすといん
秀吉と弓矢と取むん時のほもこと存ひと言上
しけし御所よも早く御得心ありて小平太とて
かろふ取計ふへと旨と仰出されしは康政うこ
ころ直し家人と走りて其旨と件の郷々へ沙汰

付たりしは神戸七郷并み三郷のめの共みれ
へ大神宮の乃り移らるゝあひしあらんさうとて
難有やたし代の正しく太平とありんまて男一
人よ弓一張の役といたしう勤めゆへと誓文
しと申ひりそのうち北畠殿へ織田源五郎長益
の即等鳴海喜太郎とて和睦の事と龍川左近将
監と仰下されけるは將監も此軍始終こしく敷う
らしとおのひびるはより津田藤三郎と使とて
城と出し喜太郎と共に是陣とてしりし三列
御所の仰し前田與十郎と誅し一益御旗本入屬と
つく御和睦あるは由と仰出されたり一益勢

とて盡たりしうへ起請文と獻し七月三日龍川
尤近將監り甥龍川源八郎とて前田與十郎と殺
さると其首と三州御陣へ奉りそのうち一益ハ蟹江
と出て三州御陣へ參上せんもさそつ面ふをとお
思ひけん恐ひゆうと都は上う花園の妙心寺と頼
みて隠と居たりしとなり秀吉卿ハ蟹江の城の軍
難義ある由と聞召され江州より大垣の城より引
返されしめ先手の勢ハとて三州勢喰付との
あそひしうは二三町となり然とも秀吉卿
の仰は三州ありめとてさそつ手出ととなりし
と嚴重ハ法度と立ちしつとハ楯突あつべたるこ

めりしとて鉄炮一つ放めと矢の一筋射出しもセ
ハ三州の御陣よりもあるの間秀吉の申つることもわ
り書翰もあし其心ハとくし知たるなり又今度
北畠殿家人等の不義と退治をらんし勢微弱し
て叶ひしし加勢と頼むとありつとハ頼むたり
しなり天下と亂さんと云ふありびまこ弓矢と以
て人の國と切取我領國と増んと云ふありび秀吉
さそつ昔ハ織田家の家僕たしとも今ハ朝廷守護
の王臣なりと云ひしなりも當時參議の頭官に任を
らし八負の座よりつとハ我等如き田舎人との
天地の相違ありと北畠殿ハ朝廷の内大臣より

のひかり参議と内大臣ととの差別ありつうとて
やたとひその身卿相と列たりとも主従の禮に
累代と及ぶとてくらしむるに秩父三浦千葉等の
祖先一度六孫王すくへ多田満仲と主とたのむ從
とたりしより以來源氏累代平氏代々相傳の家人
と親め累代の主君と仰くはあつたや右大将頼
朝卿の義朝の庶子なり然共義明常胤等の人々相
傳の主君と仰きしとおめへ北畠殿右大臣殿の
庶子なれとも秀吉と於て相傳の主君とつみへ
北畠殿主君とよまをの秀吉の家人の列とてか
るへくは然に北畠殿と秀吉と弓矢と及ぶとて

勝敗と以て味方と加らるる秀吉のあつた勝
道理と以て荷擔をとんとつら強し北畠殿道理と
勝むとも云つらつら秀吉十分の道理あるも
あつた只主従の邊とて軍を多と助けると云ふ
と付て援けあひたり但此方より進んで掛つた
つらつらと堅く制止と加えあへ何とも擧げ握り
ておえ居けるよ上方勢の内馬放とて三州勢の
備と走入たりしと三州勢のうちよく氣早はる若
の馬の口を取て上方勢と引むけ此馬御陣より
くは入てい誰とてもおろしを馬の主たる人
是へ御入ひて御引取りへと申ける何と聞

たうけん上方勢七八騎うけ出馬盗人ふと叫ひ
つゝ切てうゝる三列勢もあは不當なりその方の
馬の逸とて此方へうけ入しを取あさく主とたの
福と渡さんと云と馬盗人とハ何事ととやうとさう
めるとさあいかをぞ打殺せと鎗ととつて突う
る三列勢今ハ制止も打とそれ面もあうは駈たり
しうの上方勢も先陣うさひか續けくと馳出る上
方勢と後陣のつゞくと見るまう三列勢も負しと
進とととと大事ふ及ふつううける処へ本多平八
郎忠勝らうとこのめり三列勢とこ一招と逸と一馬
とととめり衆の人の知處馬盗人ふあうぬり

ハ既と聞えたり理しらぬ上方勢ハ邊鄙のめのか
らの三列勢の其中ふ本多と云のめり邊鄙人ふ
のめりえんとつふまうと上方勢の真先と進と
し武士と引提え馬人ともふ引めと來とハそれう
たをふ續けふくと聲々ふとさうつと十六七騎
本多一人と目よりけと追取まけハ忠勝莞尔と打
笑ひそれと物いふともさううぬま此方とて
搜えし馬と渡さんとつへハ馬盗人とよむとる不
當人それと盗人なるぬまを子細と告るゆとお
のより故とつとゆ我とまて追りけ鎗ありまを
しとも其方達と突と忠勝のうひまて太刀抜り

さして切り取りても己等も切るも本多あつた
た此ののせ尤ゆとみわすといふりゆしといふ
の取をもをんそれ請取ゆといひありう鎧うも
さ下大の男を馬の上より尤の手へ取らさへい
と聲うけ投たれは六七間りゆといふけらさ深
田のうちへ尻居よとらと打こまれさうの男ハ
起上らん起上らんとやうととも深田てあり
足たぬをせんうてなぐ手とめらさつて狂ひま
るるそあうりけり

重修真書太閤記十編卷之二終

重修真書太閤記十編卷之三

羽柴宰相三列御所凱陣と勧め奉る事

并内府信雄公と秀吉卿と和睦の事

天正十二年七月五日三列御所へ伊勢國桑名よ
著御より海へそれより濱田四日市場よ若と築を
あひ同十三日清洲へ還御ありけるよ羽柴宰相の
斥候樂田の邊へ出張しけるよ三列の御勢をゆく
る道と知てむらへ撃敵十餘人の首と得たり此由
江州へ聞えしう宰相秀吉卿大に驚さあひとよ
めく心悪さ三列勢の弓矢うか秀吉中國西國山向

向くぬのの有はそれよりして一人叛と三人叛と
三人四人終二百千の人をか叛くよつて十丈の
堤も蟬螳の穴より崩るといつり三州の兵を用
ひあふ体と聞よ百石の侍ハ鎗一本よひて草履取
具足持鎗持侍一人と召具をさよハ千石の村よ侍
十人召具十人草履取具足持鎗持三十人よ及ふ万
石よ五百人十万石よ五千人廿万石よ一万人なり
然してあの一万人をか耕地若干と領と故よ兵糧
以下とつて中國の侍より身重くして家富たり然
ハ父戰死して子父の功田と受功田段歩積りて
十百餘町よ及ふその富よ累代の蓄なりとハその

手厚とて中國の侍の及ふ処よあつて三州の
兵少くして力強く心猛と所以あり侍大将よハ
酒井尤衛門尉松平主殿助石川伯耆守大須賀五郎
尤衛門尉大久保一黨本多黨井伊兵部渡邊黨内藤
一族戸田牧野奥平つとて所領よ住つて故所當
の乃貢の其外よ松もあり檜もあり竹も篠も家の
廻りよ満々たよハ家と造るも塀垣ふんとて修復
するものとして我屋鋪よて事たよハ藏入よ餘分ハ
ありて不足なり我此人と軍して勝と得とも我兵
若干討つて其上よ根のこりたる木ハうつて植
ても活ぬ道理よと三州武士ハ我用よたつて

めくして終る和睦とへ和睦してのち我天
下と太平ふあさん第一の味方たすへとあ
返りお返し返り歎息をうととまりりて秀吉卿
陣觸ありて八月十六日濃州へ出張しあへ十九
日より先手尾州小口羽黒よのこり廿一日上奈良
五郎丸よおし出して屯とらる廿七日の早天よ松
平主殿助家忠ののこのめ羽黒樂田の邊へ打て
出上方勢の陣取りりて勢の多少と見つめり静
くよ引返りけるを見て上方勢あれと追んとあ
ゆると加藤虎之助らと追つて勢あれ
虎之助らと置不申とのくあとの分際よあ

の小勢よりけ合て何とやるを但後々の為よ
見覺あへや真先よ進り馬武者三人その外よ徒
ののの二三十人むくところ散たりあの人
の武者のうちよ大将あるへ徒のののつとも
小筒とくこは掛たりあの人筒の戦のこめあはる
合圖のためなりあま切りたりたるん時あ
の小筒のひくくを曲尺よ伏勢と引く料と知へ
あの人徒のののよ少引下りて雑人多く見え
うあまの屠兒あり屠兒の種類多こののあるう
あかまのよ三州よて軍役よとると召使
るなり何の用うとつあは實よ調寶と云へ手

負馬まをこへ打取うちとく首くびの始末しまつをこへ屠兒とらの役やくふ
り其種類しゆるいとめ集あむと速すみゆりこへ忽たちまち二千二
の教しゆと寄よぎ其次つぎは黒くろき法ほう被ひ者しやなるものありわ
せこへ黒くろ鉄てつの者ものとつひ高たかとめぬ百姓ひやくしやうあり山道やまみちを
切き開ひらくを川堀かわほりの道みち作つくらるる骨ほねとわらまびその
上うへ地下ちげ人ひとあり何処どこより親おやしこの多おほく便たす
り此方こなたの勢せいのうらよ一人ひとりも此邊こゝは知し由ゆ
したるものあるまらとて不知しらず案内あんないある三列さんれつ
勢せいへこく此所こゝももうもあらも知し由ゆありて案内あんない
は熟じやくとる左様さやうのものを拵うづ合あて軍いくさしたるんも容易やす
くくとあらひつとい見みぬもりもと引ひたるなり

と指南しゆんぱんをこへ上方かみかた勢せい何なんとも鳴呼なげと感かんけり廿八
日秀吉ひでよし卿旗本計けいほんけいを小堀こほりを放火はなつかし清洲きよすに向むかふへ
る体ていをこへ例れいの地下人ちげじんとももを散ちて速すみ
に清洲きよすに住進ぢゆしんしたる三列さんれつ御所ごしよをこへ秀吉
と打取うちとく時ときはぬと仰おほせ直ちかに打立うちたちをこへ
若舎わかしやを御動座ごどうざあり九月一日松平主殿まつだいらぬしや助家忠樂すけちやう
田でありへ打出うちだす蒔田まきでの働はたらをこへ上方かみかた勢せい見
ぬもりもと更さらに拵うづ合あは家忠けちやうのもりもに亂妨らんぱう
つる敵てきをこへあらぬもりもとこへそのあらり
に放火はなつかして民屋たみや数十すうじゆ宇焼うしやくるもりもに勝関かつせきを揚あげ引取ひきと
たり秀吉ひでよし卿けいの十七日小堀こほりをこへつとと三列さんれつ

勢更に出あひみまぬの秀吉卿いやくさく長陣
 をんやうとて樂田より引返りあひ廿五日上奈良川
 田よ要害と修築ひ人数と入置大垣も還らざる
 とて使を三州御陣へ進らと三月上旬遠州御發駕
 ろう今日に至り既よ五月ふ及ふ弓矢の意地を
 立し前九年後三年のためしもひ三年四年陣と
 ころ戦ひとつともい事へののころともあはるべ
 ひへ共秀吉元より三州より怨もなき憤もなきの定
 めて三州より秀吉より御怒も御怒もあるまじく
 ひ北畠殿の頼もあふふ如斯日数あるまじく
 鎗とまへへ太刀と合を双方より死傷もひ其罪もあ

く其禍よりい事いつらり哀し
 北畠殿へいめより秀吉抱さるゝえて生育奉り
 君達なりつら重恩の主君の御子あり何とて
 情あつた當り奉るへ北畠殿秀吉と討死しあふ
 へ御結構ありとも御年若の定めなると徒心よま
 しまひのの秀吉更よ心よりけおのひもをば
 然へその北畠殿の御援兵とて御出陣ありて御
 領の御政事怠らざるを近頃以て勿体なく早
 く御凱陣よりまひらん第一の御仁政と覺え
 ひと言上ありし御同心の御答ありて十
 月四日小牧の要害御修復と仰付らと十日まじく

てより成ぬと申上り十一月二日御巡見ありて松平主殿助家忠管沼新八即定益小幡を守りし旨仰出され十六日酒井左衛門尉忠次とゆき清洲の御留守神原小平太康政は小牧山を守りしへと仰付らば十七日濱松へ還御あそばさるる十一月六日秀吉より勢州へ發向とる由吉奉るのの有つるより同九日あつて清洲へ御動座あり然るに同十一日秀吉富田左近津田隼人正と以て北畠殿へ御和睦の事と申上けるに北畠殿も元より秀吉と殺しあはんともおぼしめさるるに秀吉は言上の旨御合點よりよし定立清左衛門尉

と以て御和睦あること由仰出されけるより秀吉卿されはるる内大臣との御心淺くましましけし今よりのち御年々こひあはれ何れとの御事ありしことよきことよきことよ安き御方ありと打笑ひ此日矢田河原に於て秀吉卿御太刀備前國長義作二尺四寸五分ありと獻しと拜禮し御和睦整ひしは犬山の城と返り奉りけり

流布本は秀吉卿の先陣と三列勢の先陣と合戦まじりとも勝負いまだ定まらば然るに秀吉卿三列勢の勇猛なる感感の策をめぐらし尾列勢を引出し是を打やぶつ始終の勝利を得る

とちのれけるより秀吉卿の旗本後陣の勢
 を以て三列勢の旗本より左右へ責やくはへま
 勢を見きよばさして尾列勢せめて一方を
 救もぐやとおのひ備をおく出以三列勢ハか祓
 てより尾列勢出張せハ必定敗軍よ及人へま
 兼てあろしめしハ御旗本よハ防戦の用意
 嚴重よかよむひ御使番を以て尾列勢をとぐめ
 られしかとも元より思慮あき尾張武者もや敵
 合ちかく進まかりけるは蜂須賀彦右工門子
 つと見て五千人を一手とあし三列勢へハ
 ら以尾列勢よ向ひ戦ふ尾列勢ハ一万余の大軍

形也とも蜂須賀父子よ切立らば色めきたちて
 見えけるを内藤四郎左工門尉大須賀五郎左工
 門尉二千余人よて援もぐやともひし又思ひ
 返して兩人蜂須賀と軍をたうち御旗本よ軍あ
 らば如何をへま見合居ける処へ秀吉卿の先
 手黒田父子二千余人よ御旗本へ切やく跡
 より秀吉卿の勢五千余人段々よ責やくるを見
 むへとも少由御旗本茂くづし玉く以大山の動
 くか如く静々と切やくし玉ふより秀吉卿を
 ちや黒田勢切負ぬへし三好孫七郎中村孫平次
 早く是をたをけよと下知し玉へハ承もぐや

御請申て二千余人黒田よはつて責めしは是
を見て池田古新輝政服坂甚内安治前野勝右工
門粕屋助右工門仙石權兵衛いひしは血氣の若
めの大浪の打やくは如く寄たるしはとも三列
方入ハ大久保本多鳥居水野丹羽渡邊永井成瀬
安藤必死ありて防ぎ戦ハ浅野長政尾列勢の
横合より突やくり無二無三よ突くべき心と競
ひやくアハ尾列勢前ハ蜂須賀の鋒きま
強く責立らば軍まごふ難義ありける処へ又
横合より浅野よ切立られ今ハをや總敗軍と見
えさうりく不どふ内藤四郎左工門尉大須賀五郎

左衛門尉いひささのこ見合まへまといハ儘
よ面もふらハ浅野よ突やくりおめきゆんて
攻戦ハ尾列勢ハ蜂須賀よ追立られ内藤大須
賀の手へあされハ内藤大須賀ハ尾列勢を
引退せんとせし不とも浅野蜂須賀よけ向ハ
火水よかれやと切結ハ秀吉卿此体を御覽し軍
を今ぢあを揉や侍ともあハ浅責よ若めの共
と立上り下知しハ三列勢まて子危ハ
く見えむひたり然るよ本多酒井榊原井伊奥平
大久保搦手よありて軍しけるハ御旗本の軍急
ありと見て其手を引上げける処へ加藤孫六嘉明

ちりてやうと逃さうと責付たり庄桐平野細川
 何とも續く攻戦ふを酒井左衛門尉榊原小平太
 足輕をせくめり例のをもゆかりし打立りか
 へ上方勢甲乙といふと知は六七十人をりく
 と打倒さゆあをを見て福嶋市松と名乗る切て
 かくはを本多平八郎しやりのしやといふ
 まくよ田原の正真る鍛たる長穂の鎗を打り
 打り突たりしかの福嶋もさくまゆ孫て見え
 けるみせ忠勝も福嶋を打きて御旗本へさく
 へ行御旗本への浅野蜂須賀をりめ秀吉卿馬廻
 りの大軍潮の涌如く寄たりしかともさくも

動しむさく長閑やうし長柄をさくめて鎗眼を
 助けまく鉄炮をうさせて長柄をいさめその間
 近めくめの枝の弓みて射おと進退七十余
 合よ及ひしかの上方勢目はおまゆ大軍おれ共
 ちりたかく進もやらし又引もせしたく真丸
 小備えて息繼居たるを余処に見おかり本多佐
 渡守正信ちりて来りしゆか処の御大将の御手
 を碎きむふ処みあらしちや御引取然ふへと
 志さうて諫め奉りける不とよ内藤大須賀おめ
 いさかくさくかの切磨けられ忽ち一方のさち
 開けしゆみより御所への圍を出させむひたり

とかくまふ処へ本多平八郎二十余人を前後左
 右に立て馳せしり追掛奉る上方勢をきり拂ひ
 突破すいと駈ぬけしあはれし浅野蜂須
 賀とまほあく御旗本を目かけ責付たり本多
 平八郎の只今まで切合突合たり上方衆を打
 きて御旗本に進みて浅野蜂須賀の脇より切
 りかき福嶋正則の忠勝をよき敵なり遁ま
 と責付し忠勝ふりかたり正則の馬の平頭を
 突けるみより馬狂ひ廻りて正則落馬し其
 間忠勝の御旗本へとせ加たり浅野蜂須賀の
 後よりおめいりやれ浅野蜂須賀の勢とも

總崩れに崩立四度路ありて見えよけり秀
 吉卿かくと見るより浅野蜂須賀を引上玉ひけ
 るみより三列勢鳴海の邊まで落のひける追
 来る敵もあかりしかる爰より休息し敗
 軍の士卒を集めらば出づる本多黨大久保黨
 酒井井伊奥平をとりめ追々走参る味方の討
 死八百余人手負の二十余人と記したる然れ共
 今もくみ参り集るもの又一万八千余人及び
 しかの上方勢は馳向ひ今一軍といささか共
 日既夕陽まかりおきけるみより大久保彦左
 衛門忠教かと血氣をとやるとおし止め本多平

八郎忠勝ふくひ壘を清正おとられ又秀吉卿
 三列御所の鳴海におちりおれ玉を知て追ふ
 以却て三列へ使者をたて御所におちり御
 歸國ありて自國の進退をあはれ玉ひ重なる出陣
 あるへくその間北畠殿おせまるとおれ玉ひ
 れし由を記き且御所より濱松へ還御秀吉卿ハ
 八月八日樂田の陣を引くらひ京都へ歸陣淺野
 彈正を樂田よりくむひ信雄公との和睦勅定
 ありふより十月廿日矢田河原にて參會といひ
 今按ふ三列御所と秀吉卿と御合戦ありて三
 列方打負鳴海まで御引退さありし由云々全く

偽あり前ふもいふごとく天正十二年三月廿八日
 小牧山を御本陣と御定ありし十月十七日
 御凱陣よりして鳴海まで御退陣ありしと
 あり依て鳴海御引退の説ハ全流布本の偽なり
 又本多佐渡守正信と記を誤り正信ハ一向宗
 の時御國茂立退し彌八郎事なり彌八郎天正十
 年春四十五歳の時治返され六月上林を説て宇
 治道を開きより暱近しゆとともその五位子
 叙せし同十四年より小牧の時の彌八郎と
 いふ又大久保彦九衛門忠教ハ永禄三年庚申の
 誕生天正十二年ハ廿五歳あり本多忠勝ハ三十

八ノヨリ一ノヨリ

三

七歳形^{なり}且^{かつ}人数^{にんず}持^{もち}入^{いれ}て物頭^{ぶつがしら}あり又信雄公と
 秀吉卿の和睦^{わくご}ハ十一月十日入^{いれ}て十月廿日
 入^{いれ}あらん十月廿日ハ秀吉いよ江州長濱^{えしゅうちやうひん}に居^ゐ
 る入^{いれ}らる此和睦ハ勅定^{ちやくてい}にあらん又秀吉卿樂田
 を引拂^{ひきかへ}ひ玉^{たま}ひくハ九月廿五日入^{いれ}て八月八日
 入^{いれ}あらん八月八日秀吉卿大垣^{おほがき}におおし居^ゐん如是^{かくのごとく}
 數條^{かずじょう}の誤^{あやま}ちを以^{もつ}て流布本^{りゅうふほん}を取^とり

目録三

重修真書大閤記第十編卷之三

終

三

